

# 紫上創造の意味

勝 矢 啓 子

## 第一章 紫上の世界

### 第一節 第一部世界における紫上

1

源氏物語第一部は、紫上を中心に考えた場合、二つの部分から構成される。前半の二条院における紫上と、後半の六条院の紫上とは形象の仕方に変化が見られるのである。

紫上という人物は、そもその出発点は、「さるは限なう心をつくし聞ゆる人（藤壺）にいとよう似奉れる」（「若紫」という所にある。光源氏は典侍より母御息所に大層よく似通っていると聞かされた藤壺への思慕に正妻葵上を得て後も苛まれる。その感情は、故桐壺更衣の私邸（後の二条院）が二つとなく立派に改造された時、「かかる所に、思ふやうならむ人を据ゑて住まばや、とのみ、歎かし

う思しわたる」（「桐壺」までに成長しているのである。紫上はその藤壺の形代として二条院に強奪のような形で引きとられる。つまり第一部前半にあっては、紫上は藤壺と二重写しされる事によつてはじめてその存在意義をもっていたといつても過言ではない。二条院における紫上は、△動的時間▽の中で——時間的成長の中で如何にして個性を確立していくか、という問題に焦点がしばられてくる。

それに対し、第一部の後半つまり六条院における紫上は、清水好子氏のいわれるように「愛らしく魅力に富んだ婦人よりは、しっかりした中年婦人の威厳がちらつき出す<sup>①</sup>」のである。二条院において一応安定した彼女を△静的時間▽帯の中でとらえる作業が六条院なのである。

（注）

① 清水好子著「源氏の女君」八一頁（塙新書）

2

光源氏をめぐる女性をあげると、藤壺宮にはじまり、葵上、六条御息所、夕顔、空蟬、軒端荻、紫上、末摘花、朧月夜君、明石君、花散里、朝顔齋院等、実に広範囲にわたる。これらの女性達の中で紫上が次第に源氏の愛をかちえていく葛藤の歴史こそ、彼女の個性の確立であった。

「賢木」巻までの彼女は、「光にとって、生きることの艱難をすべて忘失させるところの、かけがえのない愛の対象であった。」と秋山氏はいわれる。特に対藤壺関係において、密通——懷妊——出産という経過をたどる光源氏の陰惨たる世界の中で、若紫の存在は源氏にとつてのみならず、読者にとつても春風の如き清々しいものを感ぜさせたであろう。「物語に、ことさら作り出でたるやうなる御有様なり」(賢木)といわれた幸人紫上が、桐壺院崩御と藤壺受戒という決定的な権力交代の合間をぬって理想の女性として「何事につけてもけしうはあらず生ふし立てたりかしと思はず」(賢木)までに成長する様が記される。紫式部は紫上にこういう理想性を付与する事を前提として物語を進めていくのである。

紫上が女君として成長した上での競争者は藤壺、明石君、朝顔君の三人にしばることが出来る。

対藤壺においては、如何にして源氏のかなえられぬ恋のなぐさめとしての位置を脱し、一個の個性ある愛の対象となるかという点で

ある。源氏の「須磨」落ちにあたって「領し給ふ御庄、御牧よりはじめて、さるべき所々の券など皆(紫上へ)奉りおき給ふ。」(須磨)という事実は、今までの過保護的地位を脱し、はじめて妻の座を獲得した事を物語っている。須磨の閑居で京の恋しき人々を思い出す時、まず源氏の胸を焦がすのは、「女君の思したりしさま」である。「二条の院(紫上)へ奉れ給ふと、入道の宮(藤壺)のとは、書きもやり給はずくらされ給へり」(須磨)という源氏の心境には、すでに紫上と藤壺が同格にとり扱われるに到っているのである。「明石」の巻になると「先づ恋しき人の御事を思い出で給ふ」という様に藤壺を凌いで一個の主体として源氏の心をとらえていく。こうして藤壺との問題を整理した上で作者は、第二の問題を設定している。明石君との関係では、源氏ははじめから紫上を一目おいた形つきあう。それは根本的には、明石君と紫上の出自の違いによる。明石君が経済的な背景はありながら受領の娘という階級であったことは、妾腹とはいえ宮家の血筋をひく紫上を優位にたたせるのはういまでもない。しかも、源氏は明石君との関係については、逐一彼女に報告する。「人の有様(明石君)を見給ふにつけても、恋しきの慰むかたなければ、例よりも御文細やかに書き給ひて」、紫上に明石君の事をうちあげたのに対し、紫上は「忍びかねたる御夢語りにつけても、思ひ合せらるること多かるを、

うらなくもおもひけるかな契りしをまつより浪は越えじものと」と、返歌する。この大様ではあるが相当あてこすつてある返事に、源氏は明石君へのお忍びもされない。こういう光源氏と紫上の仲は、何物にも介入を許さない実に理想的な夫婦仲である。明石と京に、ひきはなされた二人の暗々裡に通う心、ここに、実に最上級の形容詞を与えてもおおしくない夫婦を設定した上で改めて明石姫君を登場さす。

「然もおはせなむと思ふあたりには心もとなくて、思ひの外に口惜しくなむ」(「濡標」)つまり、あらゆる理想性を付与された紫上の弱点は、子供の事であった。身分的にも愛情の点でも何ら脅かされるはずのない彼女が、明石姫君の存在においては一步ゆずらねばならないのである。当時の女性にとって子供の存在は自分自身の身分の保証になる。「蜻蛉日記」の兼家の妻時姫は、道隆・道兼、道長の三大臣をはじめとして、超子、詮子の二后を産んだことにより、他の妻妾とは比較にならない程安泰した地位についている。

われはまたなくこそ悲しと思ひ歎きしか、すさびにても心を分け給ひけむよ、……

紫「あはれなりし世の有様かな」と、独言のやうにうち歎きて、……作者は紫上の背後にこうした運命的なものを設定することによって新たに彼女の前に「世」の有様」を展開していくのである。

#### 紫上創造の意味

「物語にことさら作り出でたるやうな」幸人としての紫上は、朝顔宮の出現によって根本的に検討し直される。

朝顔宮の父は、桃園式部卿宮といい、桐壺院と兄弟であったし、母はその正妻である。又、現在、女五の宮という叔母を後見にもっており、彼女自身も齋院をつとめていて、世間の声望が同じく宮家の御血筋とはいっても紫上とは比較にならない程高いのである。葵上の死後、彼女にかりうる正妻として可能性をもつ女性は、六条御息所、臘月夜尚侍、花散里、朝顔齋院があげられるが、今ここでその筆頭ともいへべき朝顔宮の登場は紫上の妻の座をうばうことにもなりかねないからである。<sup>⑧</sup>「今はその、やむごとなくえさらぬ筋にてもせられし人(葵上)さえ亡くなられにしかば、げになどてかは、さやうにておはせましも(葵上の地位に代られたとしても)あしかるまじ、「少女」という女五の宮の思惑こそこの紫上の不安な位置を象徴しているのである。「まことに離れまさり給はば」という将来に対する懸念は、もはや子供っぽい嫉妬によって解決される程度のものではない。明石君の場合、常に紫上の諒解のもとに行なわれていたのに対し、朝顔宮の場合、彼女は世間のうわさによってそれを知った。もし源氏との愛が成立すれば紫上は完全に正妻の座をおりねばならないし、世間的にもそれは認められる。朝顔宮に關して全くの第三者にされてしまった紫上は沈潜していく事によりは

じめて真の嫉妬心をおぼえる。更にいえば、今までの受動的な生き方の離脱であり、女としてのめざめてもあつたわけである。だが結局、朝顔宮の堅固な道心と紫上への愛から源氏の心は紫上へもどつてくる。彼女の生活基盤に対する問いつめは「若菜」巻をまたねばならないが、ここではその第一段階として二条院の紫上の到達をみる事ができるのである。

「薄雲」巻における明石君への優位と、正身の藤壺からの解放、「朝顔」巻での朝顔宮への勝利、怨靈としての藤壺の供養、を通して紫上の位置は、一応安定した。けれどもこの安定は、より強力なものによって紫上の地位が犯される事を防ぎ得たというに止まるのである。

(注)

- ① 秋山虔著「源氏物語の世界」第一紫上の初期について八一頁
- ② 「明石」二一一九二頁「二条の君の風のつてにも漏り聞き給はむ事は、戯れにも心の隔てありけると思ひ疎まれ奉らむは、心苦しう恥かしう思さるるも強なる御志の程なりかも。」

- ③ 「朝顔」三一—二六頁「同じ筋にはものし給へどおぼえことに、昔よりやむごとなく聞え給ふを、御心など移りなばはしたなくもあべいかな、年頃の御もてなしなどは立ち並ぶ方なく、さすがにならひて、人に押し消たれんことなど、人知れず思し歎か

る。」

3

こうして一応二条院で安定した紫上を豪華絢爛たる六条院世界にくり入れることによって、作者は何を試みようとしたのであろうか。

いわゆる玉鬘物語といわれる「玉鬘」から「藤裏葉」にいたる巻々には時間的進展はない。「桐壺」から「少女」にいたる巻々が紫上の成長の跡をたどるにあつたのに比べ、この十帖は、自然の推移と人々の生活を二重写しにし、四季おりおりの情景を背景とした舞台の上に様々な人生の絵模様を展開させているのである。古今集の四季の部立にも通じるこの構想は、特に「初音」から「野分」巻に顕著に示される。

「初音」「胡蝶」前半を通して描かれるのは六条院栄華の具体的な様相である。この世界において紫上の地位は確固として他の妻妾達の上にある。「少女」における女性達の各邸の設定の仕方、「玉鬘」の衣裳配り、「初音」における新春の四季の町訪問を通して女性達の地位は決定している。彼女達は、源氏の好みに従って与えられた季節を自分の象徴としてもつ事によって六条院の人間として自己の落着き場所を得るのである。この点に関して、六条院の第一人者紫上とて他の妻妾、明石君、花散里、未摘花、空蟬と何ら相違はない。

紫上の安泰した位置は、所詮、源氏により定められた春の御方としてのそれであり、受身的に融合する事によって与えられた地位に他ならないのである。この時の紫上は確かに六条院の女君達の中の最高権威者であった。清水好子氏がいわれるように、「六条院（栄達した光源氏の大邸宅）には彼女の他にも花散里や明石の女がともにすむにもかかわらず、日々は極めて平和でさながら極楽浄土のようだ。それは、光源氏の愛情に秩序あって、誰よりも紫の上を深く愛し重んじているからである。」<sup>①</sup>しかしそうした紫上の理想化が急であればある程、彼女がいつの間にか源氏世界に融合されてしまい、讚美の筆がいくら進んでも、我々はもはや新鮮な魅力を感じなくなっているのである。

こうした六条院栄華と歩調を合せて登場してくるのが玉鬘であり、以後作品の世界は、この女性に焦点がしばられてくる。

玉鬘という人物を文面から整理してみると、その境遇に紫上と重なる部分が以外に多い事に気付く。

第一に、玉鬘にとって実父内大臣は出自を意味するだけで、実質的には父も母もいない頼るすべのない境遇におかれたことである。

これは、紫上が父兵部卿の宮がありながら源氏のもとで育てられたことと似ている。

第二に、作者をして「女の御心ばへはこの君をなむ本にすべき」

（「藤袴」）といわれた様に、容姿はもちろん、性格も理想的であった事である。

第三には、紫上と並んで玉鬘が第一部世界の二大主人公にあげられている様に、源氏の生活に密接して内面の感情が分析されている点である。

しかし紫上はまだ自分の意志の確立しない十ばかりの頃にひきとられたのに対し、玉鬘は二十ばかりの頃にひきとられている。この事は、一人前の女性として分別ある年齢で筑紫の国から六条院につれてくることによって、作者が六条院という世界を、光源氏という人間を、全くの他者によって据えなおそうとしたとよみとれる。秋山氏のいわれるように、「作者には、やはりこの六条院世界の有頂天な理想化が許されなかったので」<sup>②</sup>あろう。

六条院における玉鬘の根本的懊悩は、源氏との関係をあくまでも父と子に止めようとする彼女の理性にもとづくものであった。彼女のこの理性こそ実質的には父も母もいない境遇におかれた女性が自ら判断する事を強いられた結果のものである事を認めるのである。玉鬘は六条院の他の女性と違い、没主体性を脱した形で設定されていく。主体性を付与する事によって、はじめてこの物語は古物語の域をこえた新しい物語として女の生き方を追及していく事になる。自ら判断する生き方、これは今までの源氏物語の女性の多くに欠け

ていたものであった。紫上をふくむという女性を根底とした第一部の栄華が所詮、限りあるものであったという事を作者はここに一人の主体ある女性を登場させる事によって表明したのである。

六条院世界にいたり、すべての面で他の妻妾達の上にたち「愛らしく魅力に富んだ婦人よりは、しっかりした中年婦人の威厳がちらつき出す」とまで見られた紫上が、物語の上で玉鬘に女主人公の座を譲ってしまったのは、実はここで紫上の栄華を一方で強調しながら、玉鬘を通して第二部の暗鬱たる内面の苦悩の追求への足掛りを作ろうとしたためである。玉鬘と紫上は、実父がありながら源氏にひきとられるという点で一致していた。しかし紫上の場合、彼女の思想は源氏によって育てられたものであるため、源氏への批判は出て来ない。玉鬘は自分というものが確立した齡でひきとられたため、意識してとけこもうとすればする程、源氏の世界の矛盾にめざめていくのである。髭黒との結婚によって玉鬘が「思はずにうき宿世なりけり」(「真木柱」と一途に思いこむのは、単なる髭黒と玉鬘だけの問題ではない。「六条院の世界が、前述のように人間の内部苦悩を代償にして虚構の調和を建立し、そこに芸術的な営為を整序づけた」とは反対に、ここではなまなましいこの社会の現実的具体的な人間生活の悲しい葛藤がえぐり出されているのではないか<sup>④</sup>)と秋山氏のいわれるように玉鬘の運命こそ第二部以下の紫上の苦悩に

通じるのである。

第一部において確かに紫上は源氏世界の最高権威者として六条院に融合した。しかしその融合が果して真なるものであるかどうかを追求する第一段階としての先駆者が玉鬘であったわけである。

(註)

- ① 清水好子著「源氏の女君」八一頁。紫の上
- ② 秋山虔著「源氏物語の世界」一二二頁玉鬘をめぐる
- ③ 清水好子前掲書。
- ④ 秋山虔著「源氏物語の世界」一三二頁玉鬘をめぐる

## 第二節 第二部世界における紫上

### 1

「藤裏葉」巻には、夕霧―雲井雁の恋の成就による源氏と藤氏の和解、明石姫君入内を契機とした紫上、明石君の対面、源氏の任准太上天皇が描かれる。作者は第一部の大団円として源氏の栄華と紫上の理想性を強調することによって、古物語的な幸福な結末の型をふんだ。しかしこうした結末が決して彼女によって手放して認められていたのではなく、種々の苦悩を内包していることはすでに述べた。第一部があくまで源氏の側からの物語であったため、そういう女性の苦悩が窮極まで問いつめられずに終わったのである。

「若菜」巻は、「朱雀院の帝、ありし行幸の後、その頃ほひより例ならずなやみ渡らせ給ふ」という不予の記述よりはじまる。そこには、「藤裏葉」にみられた楽天的な雰囲気はない。

源氏が紫上を育てあげたような夫婦関係を理想とする朱雀院は自分の出家後、年の割に幼く、とりたてて後見のいない女三宮を結局は源氏以外に委ねることができないのを悟る。作者はこの物語のはじめから「後見」というものを執拗に追及している。桐壺更衣、紫上、玉鬘、未摘花等々、後見のない女性が後見のない故にいかなる人生を歩んでいくかを様々の条件のもとで捉えた。平安時代、一夫多妻制下において、女性の生活と地位を保証するのは「後見」であって、中宮定子が一条天皇との間に第一皇子敦康親王を設けたにもかかわらず、道長女彰子にけおされた悲惨な運命は、この社会機構に由来するものであったのだ。第一部で絶対的優位をほこっていた紫上の地位は、当時の社会状況からくらべあわせられた時、「いつも交替と流転を余儀なくされ、見えざる手のうごかす微妙な変動にたえず曝されていた」<sup>①</sup>貴族女性の不安な生活環境の典型として提示される。女三宮降嫁は、「紫のゆかり」の物語の流れをうけるけれども、第一部の浪漫的昔物語の世界を超越した時点で第二部は描かれていくのである。

#### 紫上創造の意味

紫上も、かかる御定など、かねてもほの聞き給ひけれど、さしもあらじ、前齋院にも懇ろに聞え給ふやうなりしかどわざとも思しとげずなりにしを、など思して、然る事もやある、とも問ひ聞え給はず、何心もなくしておはするに……（若菜上）

ここには、明石君事件を通して、朝顔宮事件を通して、身分と権力と経済力と血縁力に勝ちえた紫上がいる。かつて世のうわさで動揺した彼女の姿はない。しかし第一部世界でこうした社会的制約を破って高められた一对の夫婦の栄華が、すでに女のたちいることのできない公的次元の中で破壊されつつあった。

対世間に直面する事を女三宮降嫁と源氏の立場から余儀なくされた紫上に、作者の投影が次第に色濃くなっていくとき、はじめて伝統的な男の物語が新しく女の物語として転換されたのを見るのである。男に対する信頼感の崩壊を、作者は朱雀院―女三宮を通じて女の目からとらえた。こうした摂関制を中核とした政治的社會機構を前面におし出すことで、紫上の世界は道綱母の私的次元の苦悩を更に広い視野からとらえた女の生き方であった。

第一部のめでたしめでたしの大団円の六条院秩序を信じて疑わないう紫上と、朱雀院と彼の侍女達の言動で女三宮降嫁を決意させられた源氏の物語に筆がすすむと、そこにはもはや、純粹の愛で結ばれた男女の物語が、すでに容認されない状況を形造っているのを悟る

のである。そうした紫上にとって源氏の口から語られたこの事態に對しては、

1 おのがどちの心よりおこれる懸想にもあらず、せかるべき方なきものからをこがましく思ひ結ばほるさま世の人に瀾り聞えじ

〔若菜上〕

2 今はさりともとのみ、わが身を思ひあがり、うらなくて過しける世の人わらへならむ事を、下には思ひ続け給へど、いとおいらかにのみもてなし給へり。

〔若菜上〕

と、かつての正妻として、又准太上天皇の妻として彼女は、世間体を慮っている。しかしこの毅然たる彼女の姿勢も、現実には女三宮が

六条院に興入されると、心境は複雑に入り乱れてくる。

3 三日が程は、夜がれなく渡り給ふを、年頃さもならひ給はぬ心地に、忍ぶれどなほものあはれなり。

……………

(紫) めに近くうつればかはる世の中を行くすゑとほくたのみけるかな

〔若菜上〕

こうして紫上の孤愁が深まりつつあった時、源氏は、紫のゆかり(若紫)を引き取った当時「ざれていふかひありし」彼女にくらべ、女三宮の「いといはけなくのみ」みえる様子に、ただ張合いをなくしていく。紫上自身も女三宮のいわけない返書に「さばかりの程に

なりぬる人はいとかくはおはせぬものを」と見定め、女三宮に對して、以後嫉妬心よりも親めいた同情心で接していくようになる。しかし、女同士が円満に解決されても、源氏と紫上の間には、女の側からの不信感が芽生えたのをつみとることはできないのである。人間関係における錯誤は、紫上を次第に源氏の世界から遠ざけていくことになる。

(注)

① 井上光貞著「日本浄土教成立史の研究」一〇七頁第二章第一

節天台浄土教と貴族社会

2

朱雀院の出家は源氏と紫上に更に波紋を及ぼす。臘月夜の一件である。以上のような事態においやられた紫上に追討をかけるようにして、筆が臘月夜と源氏の関係に及ぶと、それに対処する彼女がもはや根本的に源氏と合流しない意識のもとで生活しているのを見る。

1 姫君の御事の後は、何事も、いと過ぎぬる方のやうにはあらずすこし隔つる心添ひて、見知らぬやうにておはす

〔若菜上〕

2 いみじく忍び入り給へる、御寝くたれのさまを待ちうけて、女君さばかりならむと心得給へれど、おほめかしくもてなしてお

はす(「若菜上」)

秋山虔氏は、この光源氏対朧月夜の世界の書かれたことについて「源氏物語の人生が重い歴史をせおっていることを、そしてその歴史はいま暮れがたを低迷しているのをこよなく表象している。そのことと相対的に、女三宮降嫁という状況にもついた、『若菜』冒頭以来の現実の展開は、きびしくそれじたいの運命方向をめざして行くのである。」といい、また「第二部始発に当たっての独特な方法からすれば、たしかに右のような情緒的教段の継起は後退でもあるし逸脱でもあるというべきであろう。しかし、それはじつは避けがたい後退であり、逸脱である。のみならず、そうした後退逸脱をいとなまないことには、あるいはそれを媒介としないことには、『若菜』巻の新しい方法による虚構はさらに展開を続行することができないのである。」<sup>①</sup>といわれる。女三宮―源氏―紫上という関係は、紫上に表面的地位の喪失をもたらしたが、それを自ら諦念の境地におさめることで、彼女を精神的な成長へと高めたのは、朧月夜事件による源氏を通した男の世界というものの決定的不信であった。それは「われより上の人やはあるべき(女の中では自分より上の人はある筈がない)」「(「若菜上」)という意識に支えられたものであったのであるが。こうした紫上の不信感とは逆に、宮、女御に接したにもかかわらず、源氏は長年みなれた彼女の美がやはり無

紫上創造の意味

比なものであることを再認識する。

去年より今年はまさり、昨日より今日はめづらしく、常に目なれぬさまのし給へるを、いかでかくしもありけむと思す。(「若菜上」)  
第二部の紫上と源氏は紫上が源氏への不信感にどうしようもない孤独をかんじ離れていけばいくほど、源氏は彼女がどこからどこまでも気高く立派で、華麗で現代風で、色つやの優雅な種々の生彩も何もかも美の極致を具行している事を確認する(「若菜上」)という皮肉な「世の中」の定めを描いている。自らのもてなしにおいて彼女の理想性が発揮されていく所にこそ作者は、ありたき女性の姿をとらえようとしたのではなからうか。しかし紫上の理想性は強調され賞讃されればされるだけ、より一層悲劇性をあざやかにてらし出していく。「光源氏―男の世界と次元をことにするとここで血みどろになっている紫上―女の世界のあはれなみじめさを相対的に強調するものとなっている。」<sup>②</sup>といい「女には表向きの生活とは別のそこで解放されるかくろへごとの世界はない。その悲喜哀歓は一元的であり、全身的呢のである。」<sup>③</sup>と秋山氏はいわれる。紫上にとって「世の中」とは「男女の仲」に他ならないのである。

(註)

① 秋山虔著「若菜」巻の一問題―源氏物語の方法に関する断章  
―(日本文学昭三五、七月)

② 秋山虔著「若菜」巻の問題ひとつ―源氏物語の方法に関する

断章―(国文学関西大学昭三五、十月)

## 3

「負けたからの出家ではなく、勝っているうちに出家したい。」という紫上は、第一部世界で源氏に融合していくことで自らの地位を見出した紫上ではない。「いわば彼女にとって出家は、個人の自由、自我安定の願望につながるものであった。」からである。

作者は「若菜」巻を通してしきりに明石君の「あらまほしき御宿世」をとく。「若菜上」における明石女御の若宮出産につけて、明石君の「わが宿世はいとたけくぞ覚え給ひける」「すべて今はうらめしき節もなし」という満足感、紫上の肉面的苦悩とは、正反対の位置にある。「源氏と紫上は、六条院のあるじとなるためには、明石一族の宿世と対抗しなければならなかった。」と高橋氏は説かれる。子を得た故に将来の約束された明石君と、子をもうけなかったが故に孤愁にさいなまれていく紫上。「若菜上」ではじめて女三宮と明石君に対面する折、「宮よりも、明石の君のはづかしげにて交はむを覚え、御髪すましひき繕ひておは」した紫上を思い起こす時、紫上の孤愁も、出家への意志も、畢竟一夫多妻制下では、子の存在がいかに身の安定を保証するかという女性の根源をつきとめた点にあるのを知る。作者は第一部において紫上を通して経済力、

後見という社会的地位に束縛されない女の勝利を描いた。しかし、第二部で明石君や女三宮の信望を通して、そうした勝利が現状にあっては甘い夢にすぎないことを身をもって体験したのである。

源氏四十七歳の春、朱雀院の五十賀の試楽として女楽が催される。明石御方に琵琶、紫上に和琴、女御の君に箏の御琴、女三宮に琴をたくす。そしてその春の灯にはゆる六条院の女達は、それぞれ花橘、桜、藤、柳にたとえられる。紫上を「花といはば桜にたとへてもなほ物よりすぐれたるけはひとことにものし給ふ」(「若菜下」一四九頁)と今なお六条院の四季の秩序の頂点においた所で、もはや「野分」における「かば桜」の紫上とは本質的に異っているのである。

その翌暁、紫上は発病する。場所をかえることでいくらかでも気分が直ろうかと、紫上は二条院へ移されるのである。

柏木の女三宮への密通は、この火の消えたように淋しくなった六条院で行われる。かつて源氏の栄華をほこった場所は、今、源氏にとって執念の場にかわる。自ら築いた六条院で、源氏は自分の宿世におののくのである。「若菜上」の巻は裏切られた紫上が書かれ、この「若菜下」の巻は未熟ないたらぬ若ものたちに光源氏が裏切られている。と清水好子氏はいわれる。そして作者がどちらをより強調したかといえば、それは、もはやこの世に「ただ一所の御もて

なし」のみを信じて生きてきた紫上によるべない苦悩であると思うのである。こうした源氏への不信の念を通して、作者は紫上に「世の中」即「男女の仲」である女性のはかなき宿世を感受させようとした。「若菜」巻では、「はかなき」生が根抵からほりおこされている。

源氏物語は光源氏の物語である。しかし、第二部の世界に描かれたものは、もはや源氏のたちいることのできない領域での紫上の葛藤である。源氏は紫上の心裡を理解しないまま、自分の「いとど加ふる志の程」に安住している。紫上は源氏を知りつくしてしまった故に「宣ふやうにも、はかなき身には過ぎにたる余所のおぼえはあらめど心に堪へぬもの歎かしさのみうち添ふや、さは自らの祈なりける。」としか答えようがない。ここに展開される男女の世界はもはや理想的な世界でなく、男と女が所詮一表層でしかつながらりえない、一般の男女と何らかわる所のない世界であった。ここには、生そのものの根源への式部の絶対的不信感がひそんでいる。

彼女の場合、それを単なる自己の不信感におわらせず、物語という場を通じて問題にたち向っていくことによって、人生そのものに抵抗しようとしているようにもつけとれる。

「式部の『はかなし』の意識は、道綱母のそれとくらべて、一層普遍的、また根本的であった。実感としての『はかなし』意識も強か

ったが、凡そ人生そのものが、はかなきものに見えた。『はかなし』を根抵にもちながら、それをそれとは知らずに暮してゐるやうにもみえ、また己が『はかり』『計り』、才に溺れてゐるやうにもみえ、また、それはそれで人の世ともみえた。」と唐木氏は記される。<sup>④</sup>

第一部の玉鬘が「親と思ひ聞ゆる人の御心だにうちとくまじき世なりければ」(藤袴)と自覚したが、そういう「世の中」への不信感は、すでに玉鬘を通して伏線的に示されていたもので、二部に到り、紫上の中で大きくほりさげられたのである。紫上のことばをかちて作者が女の生に対し「人間としての絶対的な不満を爆發させている」<sup>⑤</sup>のが、「夕霧」巻の次の一文である。

女ほど身の持ち方も窮屈で詰らぬものはない。風流韻事も解しない如く引籠り隠れているので一体何によって生活の面白さを味わったり、無常の世の倦怠をなくさめたりしたらよいのだろう。大方世間の道理もわきまえず、詰らない身になっているのも養育した親だって実に残念なわけではないか。思う事もいわずに、無言太子とかいって、僧達が悲しい物語にしている昔の譬のように、事のよしあしを承知しながら埋れているのも、詰らない話だ。

(「夕霧」―古典全書頭注)

第二部の紫上には、作者紫式部の姿が強く投影している。式部の投影によって、第二部の紫上は、第一部の古代的浪漫性をふみこえ

て、こんなにも深くほりさげられたのだともいえる。

(註)

- ① 「源氏物語評釈」玉上琢弥第七卷「若菜下」三三二頁
- ② 高橋和夫著「若菜巻始発における主題の意味」(『源氏物語の主題と構想』三七二頁)
- ③ 清水好子著「源氏の女君」九〇頁
- ④ 唐木順三著「無常」五六〇五七頁
- ⑤ 清水好子著「源氏の女君」九九頁

## 4

「御法」は紫上の死を描く巻である。「若紫」と「御法」と紫上はこの物語においてその生のはじめとおわりに一卷の中心人物として描かれた。

「若菜下」の大患後ひどく病気がちになり、何となしにずっと自分のすぐれないますごしている紫上は、死の予感に出家を願う。しかしその出家の希望を源氏は許さない。それは、ただ単にあとに残された者の悲しみ故の利己主義にもとづくのではない。「鈴虫」巻で秋好中宮の出家の意志を誡めたのは、「人真似にきはふ御道心は、かへりてひがひがしう、おしはかり聞えさする人もこそ侍れ。」という理由からで、特別世を厭うわけでない人が人真似に出

家することについては、冗談にもあるまじきことと書いている。この「御法」巻の源氏の出家観も「一度家を出て給ひなば仮にもこの世を顧みむとは思し掟てず」というものであり、作者式部は、こうした「ただうちあさへたる思のままの道心」に対してきびしく批判しているのである。それは、「日記」の世界において、あれほど厭世観にとらわれながら、自己の救済を出離に求めきれなかった式部にとって、厭離穢土、欣求浄土に徹した真の求道心による以外は、単なる逃避にすぎないと見ぬいていたことを証している。紫上の場合、源氏の女性のほとんどすべてが出家によって内的苦悩からのがれんとしたのとは異り、愛する人のために出家をあきらめるといふ人間的な暖さかが多分に感じられるのである。その人間性は、現実が如何に苦渋に満ちたものであったにせよ、死にのぞんでは、現実執着していく女の悲劇性に裏うちされたものであるが。

「御法」巻で紫上のような三首の歌をみると、現世に深く絶望しているにもかかわらず、現世との離別に対して無限の悲しみがこめられているのがよみとれる。

1 惜しからぬこの身ながらもかぎりとして新つきなむことのかなし  
さ(明石君との贈答)

2 絶えぬべきみのりながらぞ頼まるる世々にとむすぶ中のちぎり  
を(花散里との贈答)

3 おくとみるほどぞはかなきともすれば風に乱る萩のうは露  
(源氏、中宮との唱和)

式部はあらまほしき一組の男女の終焉を現実の世界にひきとめて描いた。しかし、ここに登場した紫上が源氏をはるかにふみこえた所まで成長しているため、それは死にのぞむ紫上への悲しい讃歌のようにはいかうけとれない。

第一部世界が、昔物語的手法を多分にふまえつつ、いかにして理想的な男女の世界ができあがっていくかの課程であるとすれば、第二部は、そうした理想的男女の世界にメスを入れることによって「世の中」への不信感を赤裸々に暴露した。ここには作者自身と同次元の苦悩をおりこむことによって、生きる場を見出そうとした式部のもだえがにじみでている。

## 第二章 紫上創造の方法

### 第一節 紫上形象方法の変化

紫上を以上のような意図を持って描ききった作者は、その形象過程において同じ筆力を彼女に押し注ぎ込んでいたのではない。

第一部の巻々は、紫上の物語というより、光源氏の物語という比重が強い。その意味で第一部の紫上は第三者的視座から観察されて

#### 紫上創造の意味

いる。作者はむしろ光源氏に自己を分身することによって物語をすすめている。物語の主導権を握っているのは他ならぬ光源氏であり、松尾氏がいわれるような第一部の「紫上が甚性格的にも行動的にも描かれ足りてゐないという不可思議な事実」<sup>①</sup>もこうした所から生じたものと思われる。また、秋山氏の「読者が所有させられる紫上の全姿は、与えられた状況のまにまに、たがいに分散しながらえがき出されたその重ねあわせによって成り立つもので、年月の流れを内面化して成長発展する人間像というものはありえないのであった」<sup>②</sup>という見解も源氏の目を通してすすめられた物語であるためにおこった現象である。紫上に対する「理想の女性」「女主人公」という暗黙の承認が、作者の意図とはうらはらにそれ以後の読者の心に一つの紫上像をうえつけていたのである。益田氏が「彼女の創作が……それは実にふしぎなことであるが女性である作家が、自己を男性の側に転位して、人間としての解放を求める男性の物語として、彼女の想像力を展開していったことである」とし、「女性の境涯の苦しみとたたかう女たちの像は、まだ社会の共有物として生みだされていなかったらしい」<sup>③</sup>と記しておられるように、第一部の世界はそうした昔物語の伝統的手法から完全にはぬけきれず、あくまで源氏の世界の中に生かされる女性としての紫上であった。

ところが第二部に入ると、作者は次第に源氏を通して描くことを

やめ、作者の視点は紫上のそれと重なってくる。第二部のいいしれぬ絶望の世界が、もはや源氏の目を通してでなく、紫上に托された紫式部その人の葛藤の場であることを発見するのである。第二部にはもはや男の側からの世界はない。そしてこの老大な絵巻物の中で、唯一対の理想的な夫婦であったはずの源氏と紫上が所詮「自分は自分、相手は相手、それぞれに孤独であることを証すほかない」<sup>①</sup>対話をくり返す若菜巻の世界は、第一部の理想化の中にふくみこまれていた男と女の世界の矛盾が彼女のうちに大きく成長し、絶望的な定着をとげた結果であったことをみるのである。「当時の貴族社会のように一夫多妻制が公然とおこなわれていた社会にあつては、たとえどのように豊饒な物質的享樂が保証されていたにせよ、そこに女性の人間の解放と自由と幸福があつたはずはない」<sup>②</sup>と西郷氏は記される。一般の女性達が無意識のうちに漠然とうけとめていた「世の中」への不満を自分の切実なる問題としてとらえ、發展させたのが式部であった。紫上を通して描かれた世界こそ、作者自らの自我解放の歴史であり、第二部の紫上にいつのまにか近代的な自我のめざめが見られるのは、男の目を通しての文学方法からの女の目を通しての文学方法へと進展をみせた作者自身の近代的自我の獲得であったからに他ならない。

(註)

① 松尾聰著「紫上——一つのやや奇矯なる試論（「解釈と鑑賞」昭二四、八月）」

② 秋山虔著「源氏物語の世界」九一頁紫上の初期について

③ 益田勝実著「源氏物語の到達」一一八頁（解釈と鑑賞昭三八、一月）

④ 秋山虔著「源氏物語が語りかけるもの（「古典と近代文学」第二号一〇頁）」

⑤ 西郷信綱著「日本文学の方法」一四八頁

## 第二節 紫上物語の到達点

嫉妬することさえ許されない状況におかれた紫上が、次第に孤愁の世界に入っていくその過程は、すでに道綱母が「蜻蛉日記」でとらえたものであったが、道綱母の場合は中流貴族の女性の問題をつきつめていったのに対し、式部の場合は「彼女一個人の身上にかぎらず、より広いシチュエーションに立って、貴族社会の現実、特にその社会の女性たちの背負っていた時代の運命を、先験的、主情的な觀念におぼれず、くさぐさの男女関係の典型的な設定によって、現実の中から、より真実な世界をさぐり出し」<sup>①</sup>たのである。源氏物語には、女の宿世のはかなさをなげく文が非常に多くお

りこまれている。式部が道綱母のように実体験として男女間の苦悩を、それほど深く経験することなしに、夫と死別したにもかかわらず、道綱母の苦悩をはるかにこえた全的な女性の宿世を追究したことをしるとき、彼女が日記に記したあの絶対的厭世観に到達しなければならなかった精神の鬱積を感ぜずにはいられないのである。

作者は第一部第二部を通して貴族社会の物語に「中の品」の女性を中心人物に仕立てるといふ点において画期的な試みをした。源氏をめぐる女性群像の中で紫上ほど成長した女性はない。「中の品」としての彼女が所詮源氏とかかわりのない所で内面的葛藤をつづねばならなかったことは、現在おかれた状況に耐える以外、救われることのなかった当時の女性の悲劇性を象徴しているのである。第二部の世界で、それが根底で交わらなかつたにせよ、紫上なしに生きられない源氏の姿を描いて結末をつけている。しかし作者の創作行為はここで止まるものではない。紫上を通して「世の中」の真髓につき進めた作者は、第三部で大君を創造することによって、後見を失った故の立場の弱さを現実的テーマの中でつきすすめていくのである。

われも人も見おとさず、心違はで止みにしがな、と思ふ心づかひ  
深くし給へり（「総角」）

「自分（大君）も薫も互に見下げず、また背くことなく通した

#### 紫上創造の意味

いものだ」という大君には、現実には不信を感じ、苦悩している紫上の面影がある。大君の結婚拒否の姿勢は、薫への不信からくるものではなく、むしろ「心地にはおほえながら、物言ふがいと苦しくてなむ。日頃おとつれ給はざりつれば、おほつかなくて過ぎ侍りぬべきにや、と、くちをしくこそ侍りつれ」（「総角」）に表われているように、薫への信頼をうちに秘めつつも、あまりにも完全な愛の姿を求めつづけた結末であった。紫式部は、現時点にたつ男女の姿を源氏と紫上を通して描くことによって、一夫多妻の慣習下で「中の品」の女として上流貴族社会の中で生きることの苦澁を語りつくしたが、更に薫と大君という高次の愛を想到することによって「世の中」そのものに対する紫上の不信感を更につきすすめた。大君の結婚拒否の論理は源氏と紫上を継承して追及せられた「世の中」の窮極の姿である。

（註）

① 南波浩著「物語文学概説」二五一頁

#### おわりに

紫上を通して描かれた貴族社会への融合―分離、更に大君によってひきつがれた否定という段階をたどった源氏物語の女君の設定のされ方をふり返ってみる時、作者式部にとって、書くという行為そ

のものが、世の中への不信感、はかなき意識からのがれる唯一一つの  
 生息の場であったことが知られてくる。

紫上の虚構世界に作者が定着していけばいくほど、彼女の第二の  
 人生としてそれがつくられたものであるだけに、その懊悩は生きる  
 ことの極限にまで問いつめられている。紫式部が豪奢な中宮彰子の  
 世界に進出してえたものは、中の品の女性達の玉の輿にのる夢に対  
 する反省であり、そうした社会全般への批判である。

私は「源氏物語」を紫上を通して式部自身の自我の解放と関連づ  
 けて解釈してみた。しかしこの物語にはこの一面ではとらえられな  
 いあまりにも多くの残された問題が内包されている。紫式部のいた  
 っていた問題の大きさが比類のない重みとなって彼女自身にはねか  
 えっていった結果の創作行為を考えると、遂に出家せず一生を  
 おくったといわれる紫式部の女であるゆえの生への鋭い洞察力を知  
 るのである。